



目次

1. FD 合宿研修会の目的と概要
第1日目の研修内容/第2日目の研修内容/.参加者のアンケート・感想
2. 春学期公開授業の目的と概要
理工学部/教育人間科学部/留学生センター/経営学部
3. 教育改善学生スタッフ主催「しゃべり場」について
4. 外部セミナー参加報告
5. FD シンポジウムのお知らせ

FD 合宿研修会報告

FD推進部兼務教員 物部博文

平成24年度FD合宿研修会の実施概要

「学内の人的資源を発掘し、ファカルティ・デベロッパー（FDer）の役割を担うリーダーの育成を目指す。」ことを目的として、平成24年8月30日（木）から31日（金）にかけて八王子セミナーハウスでFD合宿研修会を実施した。

平成24年度は、ミドル・レベル（カリキュラム）のFD活動からマイクロ・レベル（授業）のFDに立ち返り、学生の理解を深めるアクティブ・ラーニングと成績評価の在り方の再考を柱として研修会を実施した。

大学教育総合センター長小野康男教授をはじめとして27名が参加した。

また、SDとの共同から多くの職員と学生FDスタッフが参加するなど、さまざまな立ち位置の参加者が集まり、内容の濃いディスカッションが行われた。

1日目:アクティブ・ラーニングへの招待

第1日目は、「アクティブ・ラーニングへの招待～学生の理解を深める効果的な学習方法～」として学生がいかに主体的に学ぶかをテーマに研修会を実施した。

まず、FD推進部門長の上野誠也教授よりアクティブ・ラーニングの必要性と本学におけるアクティブ・ラーニングへの取り組み（平成23年度

の活動事例)が報告された。続いて、国内における協同学習研究の第一人者である創価大学関田一彦教授の講演及びワークショップが実施された。ここでは、自らのための学びだけではなく、一緒に学習する仲間のために自分が学習するような協同学習が学士力や社会人としての基礎的能力を身につけるのに効果的であるという講演や、そのための具体的な手法をワークショップとして学ぶ機会が得られた。

2日目:教育の質の保証を考える

第2日目は、「教育の質の保証を考える ～成績評価のあり方について再考する～」をテーマとして成績評価の在り方について再考することを試みた。

まず、北海道大学の小笠原正明名誉教授から「主体的な学びを実現するための成績評価の在り方」についての講演とディスカッション、および質疑応答があった。授業の目的の明確化や教育効果の向上、教育機関としての説明責任等に成績評価は必要であること、ポイントは卓越性の評価をどうするかという点であること、また、クラスサイズ別にみた成績評価のガイドライン、正しい評価基準設定のための条件、ルーブリック評価の活用、TAの活用、大規模授業の改革等が必要であること等の重要な情報が得られた。

続いて、学生FDスタッフから学生側からみた成績評価に対する希望についての報告があり、成績評価のより一層の透明化、フィードバック(レポートの返却や試験答案の返却)の必要性等の意見が寄せられた。

さらに、教員、職員、学生3者を交えたディスカッションでは、3班に分かれてディスカッションをし、フィードバックの重要性や成績基準の在り方等についての意見が寄せられた。

午後は、FD推進部門長上野誠也教授からル

<一日目>

テーマ:「アクティブ・ラーニングへの招待
～学生の理解を深める効果的な学習方法～」

開会挨拶

・・・大学教育総合センター長 小野康男

プログラムⅠ①「横浜国立大学におけるアクティブ・ラーニングへの取り組み」

・・・FD推進部門長 上野誠也

プログラムⅠ②「学生の意識を変える協同学習」

・・・創価大学 関田一彦

<二日目>

テーマ:教育の質の保証を考える ～成績評価のあり方について再考する～

プログラムⅡ①「主体的な学びを実現するための成績評価の在り方」

・・・北海道大学/筑波大学 小笠原正明

プログラムⅡ②「学生側から見た成績評価に対する希望」

・・・学生FDスタッフ

プログラムⅡ③「何が足りない?何をすればいい?ディスカッション」

プログラムⅡ④「ルーブリック評価の実例」

・・・FD推進部門長 上野誠也

プログラムⅡ⑤「授業におけるルーブリックの試案作成演習」

・・・FD推進部門長 上野誠也

閉会

ルーブリック評価についての説明がされた後、参加者が自分に関係ある科目のルーブリックを作成した。

今年のFD合宿研修会は、自分の授業を振り返られる内容であったために、参加者からも自

らの授業を振り返る機会が得られ、ためになったという声が多く聞かれた。

横浜国立大学におけるアクティブ・ラーニングの取り組み

FD推進部門長 上野誠也

FD推進部門長 上野誠也

本合宿でアクティブ・ラーニングを取り上げるにあたって、FD推進部のアクティブ・ラーニングの取り組みを紹介する。主な内容は、平成23年度のFDシンポジウムであるが、その前提としての社会背景や大学への要求なども紹介する。

現代社会は、新技術の開発や価値観の急変などの影響を受けて、常に急激に変化し続けている。その社会が要求する知識は、「AはBである」という命題知から、実践で活用できる知識に変化している。多くの知識から使える知識が要求されている。これに対応するためには、学生は卒業後も継続的に学習することが必要であり、従来型の多くの命題値を蓄積する教育スタイルでは満足しなくなった。大学教育には、学び方を教えることが要求されている。このような社会背景を受けて、アクティブ・ラーニングは近年注目を浴びることとなった。

タイムリーな情報として、文部科学省の中央教育審議会が合宿の直前の8月24日に第2期教育振興基本計画の審議経過報告を発表した。教育振興基本計画は、幼児教育から生涯教育に至る全ての教育について5年間にわたる国の施策を示している。その中で大学教育に関わる施策にアクティブ・ラーニングに関する事項が挙げられている。それは「基本施策7 学生の主体的な学びの確立に向けた大学教育の質的転



受講者によるアクティブ・ラーニングの実践

換」である。この施策の基本的な考え方を説明した文に「アクティブ・ラーニング」を始めとし、上述の数々のキーワードが組込まれている。

このような背景を受けて、FD推進部は平成23年度のFDシンポジウムで「アクティブ・ラーニング」を取り上げた。シンポジウムの詳細は既にニュースレター第18号で紹介しているので、ここでは要点のみを紹介する。京都大学の溝上慎一先生を講師として「学生の自らの思考を促すアクティブ・ラーニング」のご講演をいただいた。そこでは、大学の使命を考えるならば、知識習得の場である「受動型」と知識活用能力養成の場である「能動型」が存在することが必要であることが示唆された。本学の事例紹介として、教育人間科学部の有元典文教授と都市イノベーション研究院の谷和夫教授により、アクティブ型講義の紹介をいただいた。両者に共通している点としては、授業外時間学習の量が多いことと授業中の学生は常に考えているこ

とである。

平成24年度のFD推進部の重点テーマの一つに「教員が教える学びから学生が学ぶ教育へ」がある。まさにアクティブ・ラーニングそのものである。これを受けて本合宿は企画されたが、そのほかにも様々な活動を展開している。学生

が主体的に学ぶためには、現在の状況を認識する自己認識と将来の学習を自分の意志で計画する自己制御が必要である。FD推進部としては、その環境作りとして、カリキュラム・マップ／ツリーの作成支援やe-ポートフォリオの活用講習会などを計画している。

学生の意識を変える協同学習

創価大学 関田一彦教授

FD推進部門長 上野誠也

講演自体が協同学習

講師の関田先生は、アクティブ・ラーニングの一つである協同学習を永年研究対象とされ、多くの著書を執筆されている。日本における協同学習の専門家といえば誰もが名前を挙げる方であり、現在は日本協同教育学会の会長を勤められている。ソフトな口調で話され、司会者が「関田ワールド」と紹介する講演は聴衆全員を引き込む独特な手法である。実は、この講演自体が協同学習の演習、すなわち、聴衆は協同学習の主体者になっていたことを徐々に気が付くことになる。

グルーピングの要点

協同学習はグループを形成することが第一歩である。ここでは、自己紹介を手段として、グルーピングの基本を教わった。まず、2人ずつのペアになり、お互いに名前などの3項目の自己紹介をする。次に、他のペアに対して、自分のペアのもう一人を紹介する。これで4人のグループが構成されたことになる。そして、最後に、関田先生がグループの誰かを紹介するように確認の質問をする。ここに2つの要点が含まれている。

- ・目標の見通しがあれば、人は動く。今回は、3人分の3項目の自己紹介内容を覚えると



講演中の関田先生

いう目標である。

- ・後で確認されるとなれば、人は他人の話を真剣に聞く。今回は、他人の自己紹介内容を確認することを事前に知らされていた。

非常に簡単なことであるが、人の話を真剣に聞き、それを覚える要点を実習で体験した。この要点を通常の講義で守れば、学生は真剣に講義内容を聞くことになる。さらに、お互いの自己紹介を真剣に聞いたことで、グルーピングが完成した。グルーピングとは、心理的抵抗を下げるのがポイントであり、自己紹介の中に個人的な話題を加えることが要点となる。今回は、「最近夢中になっていること」を紹介させられた。これにより、その後のグループ内のディスカッションが円滑に進められるようになった。

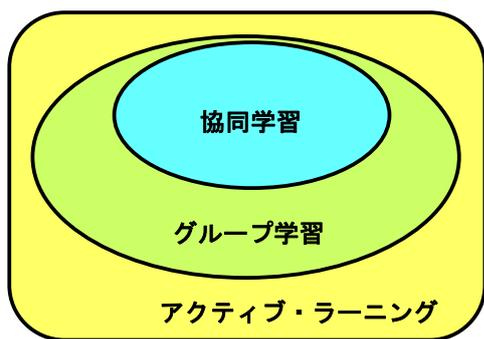


図1 協同学習の位置付け

協同学習の基本要素

協同学習とは、図1に示すようにアクティブ・ラーニングの中のグループ学習の中に位置づけられる。グループ学習と異なる点は、次の基本要素を含むことである。

- ・ 互恵的な協力関係（肯定的相互依存）
- ・ グループの目標と個人の責任の明確化

前者は、自らの学びが仲間の役に立ち、そして仲間の学びが自分の役に立つという考え方である。そして、後者は、全員がメリットを得る方向に動くとなれば、個人の責任が明確となり、責任があるから手を抜かなくなるという論理である。両者が成立して初めて協同学習が成り立つのである。ここで大切なことは「自他共栄のこころ」が存在することが、協同学習の目指すところであり、受動型の単独の学習では得られない点である。実は、意識することは少ないが、我々が生きている社会は協同を前提に成り立っているのである。すなわち、協同学習は社会へ適応する人間育成の手法であるとも言える。

ディスカッションの要点

アクティブ・ラーニングの核ともいえるディスカッションは協同学習でも重要な役割を占める。一部の発言者だけでなく、全員が参加することが重要である。そのための手法も体験した。

- ・ 発言する機会はメンバーに均等に与える。
- ・ 発言内容は短く、発言回数を増やす。

発言する機会が与えられるとなれば、人は真剣に考え出す。そのために、グループの人数以上の発言が得られるような課題を設定することが重要である。ここで教員の役割も述べられた。

- ・ 発言しやすい課題を与える。
- ・ 適切な時間管理を行う。

前者は既に説明している通り、全員に発言機会を与えるものである。後者は、短時間に設定することで、ディスカッションに全員が集中するための手法である。

単にディスカッションを行えと指示しても、参加者が円滑なディスカッションをすることは期待できない。効果的な結論を得るためには、すなわち、参加者が深い学びを得るためには次の3段階の手順がある。

- [1] 個人思考の時間
- [2] 集団思考の時間
- [3] 成果確認の時間

まず、与えられた課題に対して自分ひとりで考え、答やアイデアをつかむ作業が第1段階である。ここで得られた答やアイデアがなければ、第2段階のグループでのディスカッションは空回りする。第3段階の確認は、教室全体での確認であり、グループで出た結論を発信することである。プレゼンテーションから試験に至るまで、様々な発信手法があり、全体の参加者数に適した手法を選ぶことができる。最後の確認があることで、参加者全員がディスカッション内容を結論へ導く努力を行うことができる。

「関田ワールド」の魅力

講演は休憩を挟みながら3時間に及んだ。しかし、終ってみれば、それほど長いという印象はなかった。しかし、参加者のアンケートには、「少々ペースが遅い」「もっと多くのことを教えてほしい」という感想があった。多くのことを詰め込むような講演はできると思う。しかし、関田先生は

常に聴衆の反応を見ながら話を進めており、全員が話についてくるように配慮していた。それに適したペースだった。

講演の途中で、関田先生が突然「今までに話した内容で、賛同する点や疑問点を隣の人に話してください。」と課題を投げかけた。なぜこの場で振り返りが必要なのか、疑問に思った参加者が「この課題の目的は何ですか？」と質問した。関田先生の回答は「リフレッシュ」であった。そこまで関田先生の説明が続いたので、聴衆にアクテ

ィブさが欠けてきたのを感じたのである。まさにこれがアクティブ・ラーニングを意識した講義である。知識伝達を主とした受動型の講義の中にも、一言で聴衆をアクティブにさせるコツがある。このタイミングは、聴衆から発信している信号を講師が受け取ることで知ることができる。アクティブ・ラーニングは学生の行動を活性化させることに注目されているが、そのためには教員も学生からの信号を受け取り、それへアクティブに答えることも必要であることを教えられた。

第2日目講演「主体的な学びを実現するための成績評価の在り方」

北海道大学 小笠原正明名誉教授

FD推進部門長 上野誠也

『卓越性の評価』が必要

講師の小笠原先生は、大学教育を専門とされ、現在は筑波大学の客員教授に就かれている。平成21年より大学教育学会の会長を務められており、大学教育に関する著書も多い。本学におけるTA研修会は小笠原先生の著書を参考に実施している。今回のFD合宿研修会には前日から合流していただき、参加者は気楽に先生との意見交換をさせていただいた。

「成績評価は難しい」から講演は始まった。しかし、歴史を振り返れば、成績評価の質が低下した時代は大学の質も低下したという事実がある。大学自体が衰退しないためには、厳密な成績評価が必要である。さらに、成績評価を行うことで、①授業の目的が明確になる、②学生が努力する方向を示す、③学生の才能の発現を促すなどの利点を得られる。ここで重要な点は『卓越性の評価』である。成績評価というと、一般には合格か不合格かが気になる点である。注目点はそこではなく、群を抜いた良い成績かどうかを評価することが



講演中の小笠原先生

重要でなる。これにより優秀な学生をさらに伸ばすことができ、大学の質の向上に繋がるということである。

● 評価基準の明確化

学生の成績分布から評価の良し悪しに分かる実例を紹介していただいた。卓越性の評価ができる分布は、成績上位者の分布が正確に表現できていることが必要である。正規分布のような単分散型が望ましい。ところが、成績を甘くつける、すなわち、「優」評価が多くなると優秀な学生も一般の中に埋もれてしまい卓越性が示されないこ

とになる。一般の学生は勉強しなくなり、優秀な学生も自分の能力を伸ばそうとしなくなる。実例を用いて、大規模クラスで出席点を重視するこの傾向があることを紹介していただいた。

相対評価を行えば、成績分布は単分散型となる。小規模クラスは絶対評価しかできないけれども、正しい評価基準があれば単分散型の分布になる。大規模クラスでは正確な評価には時間がかかるけれども、単分散型の成績分布が得られる。評価基準を明確にすることで、相対評価と絶対評価の区別が無くなるものである。

正しい評価基準の設定のための条件が紹介された。そのためには、①整合性のとれたカリキュラムであること、②授業の目標が正しく設定されていることが前提条件として挙げられた。その中で、社会への適応までを考えた評価基準を設定し、達成可能でかつ測定可能な基準を作ることが重要であることが示された。

成績評価に工夫された実例を紹介された。「到達度評価」と「大規模クラスの標準化」である。到達度評価では、試験で測定する方法とルーブリ

ック評価が紹介された。思考課程を言語化させ、それを評価することで、幅広い意味での「学力」が評価できる。大規模クラスの標準化では、訓練したTAを導入すれば数100人のレポートも正確に評価できることが可能である。

成績評価は組織の問題

成績評価は教員個人の判断に任されているが、実は組織の問題である。目標が明確になるカリキュラムがあり、正しく評価できる体制があって、厳格な評価が可能となる。常に、次に起こる事態を予見し、時間をかけて、戦略的に構築することが重要であるという結論で講演は締めくくられた。

討論の重要性

講演の後は15分間のグループ討論である。課題は「成績評価の外部委員制度は必要か」である。評価基準の適正化を外部から評価されることの賛否を討論した。講演の中で教育における「討論」の重要性を指摘され、それを実践する場を設けた。教員・職員・学生が対等に議論するとなった。

学生側からみた成績評価に対する希望

教育改善学生グループ

FD推進部門長 上野誠也

学生の視点の重要性

教員側の一方的な視野から成績評価を論じるのは片手落ちである。評価される学生側の視点から成績評価をどうとらえているのかをFD推進部会に所属する教育改善学生グループ（通称：学生FDグループ）に発表していただいた。平成24年6月29日に開催された「しゃべり場」で、成績評価に関する議論が行われていた。そ



合宿に参加した4名の学生FDスタッフ

の成果を報告する形で学生からの発表があった。

「しゃべり場」とは、学生・職員・教員が集まり、お互いが持つ教育に関する問題意識や理想像を自由に話し合い、教育改善提案につなげていく討論の場である。

学生からの提案

「しゃべり場」で出された問題提起から議論の内容をまとめ、提案へとまとめられた。

提案：シラバスの改善と学生への評価のフィードバック徹底による「成績の透明化」

学生はレポート等の課題を提出したり、試験を受けたりしているが、それらが返却されることは非常に少ない。学生は採点や添削された試験やレポートを授業内容の復習に活用したいという希望がある。さらに、それによって現在の自分の学習達成度を把握し、次学期以降の学習につなげたいと考えている。教員が考える理想的な学修サイクルが、教員によって阻害されているとの指摘である。

提案は以下の要点が述べられ、学生が真剣に考えた成果が示されていた。

返却に関して、一斉返却が無理ならば、個人的に返却を希望できる環境の整備を提案している。

発表は、「公平」「公正」「公知」をキーワード

に主張をまとめた。「公平」は授業担当の教員間のばらつきをなくすことである。「公正」は学生個人間の差がない評価の統一である。そして、「公知」はシラバス等を通して評価基準の公開を意味する。教員はこれらの提案に答える義務

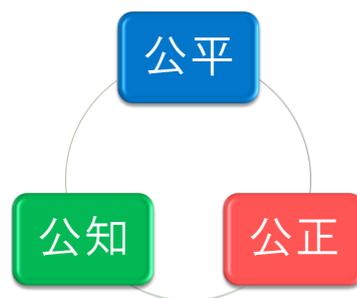
<シラバスの改善提案>

- ・ 評価の観点の見直し
- ・ 到達度評価の導入

<学生への評価のフィードバック徹底のための改善案>

- ・ シラバスに評価の観点やその比率を明記し、それに基づく明瞭な評価
- ・ テストやレポートの返却を徹底

がある。



学生の成績評価への希望

ディスカッション：「何が足りない？何をすればいい？」

FD推進部門長 上野誠也

FD推進部門長 上野誠也

合宿2日目午前の部の最後のプログラムは、グループ・ディスカッションである。教員・職員・学生で構成される5~6名のグループに分かれ、本学の成績評価について、問題点の抽出と改善提案を議論した。ディスカッションはKJ法を用い、各自の意見を順に出し合い、類似意見をまとめた。最後にグループで議論したこと



ディスカッションの様子

を全体で共有して、まとめとした。発言された

意見を以下の表に示す。

公平性	<ul style="list-style-type: none"> ・教員による評価のバラつき ・クラスごとの成績のばらつきは評価方法が違うことにもよるはず。どこまで統一するか。 ・評価も多様であっていいという意見が面白かったが、多様性を失わず厳格化をいかにやるか。 ・非常勤講師の先生とよく話す必要有(教える内容、成績評価 など) ・絶対評価か相対評価か。教員間の考えの相違あり。 	フォローアップ/改善	<ul style="list-style-type: none"> ・留年率の改善(原因分析、学科としての対応) ・分布が偏ってる時の自己分析 ・大学として成績データの分析ができていない。 ・実際の調査から、それを踏まえて改善されたかどうかわからない。 ・学生の意見がどれほど反映されているかわからない。
フィードバック	<ul style="list-style-type: none"> ・フィードバックは授業支援システム等を活用 ・学生が求めている内容は不明確。何をフィードバックすればよいか。 ・学生数が多い時フィードバックが難。 ・小レポートの返却をしても取りに来ない。希望する学生のみに小レポートを返却したい。 	意識改革	<ul style="list-style-type: none"> ・単位のために学習しているのではないという学生全体の意識改革も必要。 ・学生の質の変化に適応した教育(ゆとり世代)
目標と基準	<ul style="list-style-type: none"> ・評価基準が明確でない実感 ・学生に対して評価基準が曖昧 ・何が評価されるか学生が理解していない。 ・基準があいまい、抽象的で明確でない。 ・先生によって同じ授業でも評価基準が違う。 ・同じねらいの科目で先生差があること。 ・成績評価の基準を把握していない 	現状認識	<ul style="list-style-type: none"> ・成績分布の可視化 ・クラス内の位置?
		教育システム	<ul style="list-style-type: none"> ・学生からの異議申し立てのしくみが無い。 ・不可の場合は成績の評価内容を説明し、学生に納得してもらう必要があると思う。 ・TA活用
		秀/相対評価	<ul style="list-style-type: none"> ・「秀」の数の基準が何故 10%なのか分からない。 ・学生が比率を認識していない。 ・秀をモチベーションにどうつなげるのか。学生と教員との共通認識が必要。



「ルーブリック評価の実例」 / 「授業におけるルーブリックの試案

作成演習」

FD 推進部門長 上野誠也

FD 推進部門長 上野誠也

合宿2日目の午後は具体的な授業科目に対してルーブリックを作成する演習を行った。ルーブリックは、授業科目の項目毎にどこまで到達した

かを判定する表である。縦に評価項目が、横に評価基準が示され、表の中には各評価項目の評価基準を満たした状態が文章で書かれている。この演

習では、ルーブリックの作成に関する問題点を抽出することも課題として取り上げ、作成上の注意点を明確にすることとした。まず、最初にFD推進部門長から作成の手順が紹介され、それに従ってルーブリックの作成作業を始めた。作成がほぼ終了する頃からグループ内で作成した表の説明と作成上の問題点を議論した。



ルーブリック評価の作成作業の風景

今回作成したルーブリックは、成績評価に使用する採点用ルーブリックである。シラバスの到達目標に対応する形式として、以下の規則で作成を行った。

- 1) 評価項目はシラバスの到達目標の各項目が書かれている。
- 2) 評価基準は、SABCの4段階とする。
- 3) 評価基準Cは到達目標の最低基準を示し、それを満たさない状態は不可に相当する。

4) 評価基準Sは、将来に到達する目標を示し、該当者がいないレベルでも構わない。この規則に従って作成作業を行い、作成上の問題点などを議論した。

作成した表の紹介の中で、作業によい示唆を与えるアイデアがあった。

- ・評価基準Sは「これから学ぶ授業科目との関連を説明することができる」とした。
- ・実社会を想定して、評価基準Sは「新商品の開発に応用できる」とした。

両者とも継続的な学習を考慮したよい点を表現している。グループ・ディスカッションでは問題点や利点のコメントもあった。

- ・評価基準Cで、「多少の誤りがあるが、…」とすると誤りを許容することになる。表現を工夫する必要がある。
- ・独創性をどのように表現するかが難しい。
- ・試験科目で公開すると、記載された項目しか勉強しなくなると思う。
- ・この表を作ると、授業計画が整理され教員のためになる。

FD推進部はこれらのコメントを含め、ルーブリックを紹介する記事を掲載する予定である。

FD合宿研修会 参加者のアンケートより

FD推進部門長 上野誠也

参加者の評価

参加された方に、このFD合宿研修会についてのアンケートに答えてもらった。5段階評価項目と自由記述のアンケートである。教員・職員・学生を区別することなく、5段階評価は回答を1点から5点の点数とみなして平均値を求めてみた。特徴ある問を紹介する。

問 この研修への参加動機は積極的でしたか？
[消極的…1点 積極的…5点]

平均点：3.17点

問 この研修に参加してよかったと思いますか？
[思わない…1点 思う…5点]

平均点：4.53点

参加動機は二極化されており、消極的(1点)に2割の回答があった。しかし、参加は消極的であり

ながら、参加してよかったという回答が多く、問2の平均点は4.53点と高い値になっている。参加するまでのハードルが高く、是非、参加された方は周囲の方に内容の良さを伝えていただきたい。

問 この研修のテーマの設定はいかがでしたか？ [悪い…1点 良い…5点]

平均点：4.63点

問 内容の難易度はいかがでしたか？ [易しい…1点 難しい…5点]

平均点：3.26点

問 今回の研修の講師陣を総合的に判断して下さい。 [悪い…1点 良い…5点]

平均点：4.47点

テーマの設定は問題が無かったし、講師陣も良かったという回答が多かった。難易度も、ほぼ中間の値を示し、問題なかったと判断できる。

問 大学セミナーハウスを利用したことについて。 [悪い…1点 良い…5点]

平均点：3.21点

質問の中で最も評価が厳しい回答であった。大学から離れているとか、交通の便が悪いなどが自由記述で指摘されている。

自由記述より

アンケートの自由記述欄に記載された意見を示す。()内は教員、職員、学生を表している。なお、紙面の都合上、代表的な意見のみの掲載となっている。

問 この研修において、良かったと思う点

- ・教員・職員・学生の相互理解と交流が深まったこと。(職)
- ・成績評価の考え方の幅が広がった。(教)
- ・成績評価。教務厚生部会でも議論しており、学生や講師の意見がよかった。(職)
- ・学生が対等に参加し、議論し、学べた。(教)
- ・協同学習や成績評価に対して、自分の考えや今後の改善点を整理できた点。(教)
- ・体系的に聞けた点がよかった。ゼミの改善に直接関係するテーマでよかった。(教)
- ・授業のやり方を根本的に考え直す時間を普段は取ることができないので有益だった。(教)

問 この研修で、良くなかったと思う点

- ・一部の参加者しかいない点。今回の事例を取り



入れようとしても承諾が得られない。(学)

- ・ルーブリック評価は教員向けの研修であり、職員への配慮が必要。(職)
- ・取り上げたテーマの各種問題点に関する解決策やノウハウを知りたい。(教)

問 これからの授業や教育活動にどのように展開していこうと考えていますか？

- ・国大の教育改善に取り組むコアメンバーが組織化できたらいい。(職)
- ・アクティブ・ラーニング(Gディスカッション、課題実習)を取り入れ、講義：テスト：実習を

2：1：1ぐらいにしたい(教)

- ・自分の勉強の仕方をより良くしていきたい。(学)
- ・PBLを導入したい。ただし、カリキュラムとの整合性をつけるという課題との両立が難しい。(教)
- ・むやみに導入するのではなく、効果が高い課題に対しては導入していこうと思う。(教)
- ・まずは自分の講義から、部分的、効果的に、ここで研修した内容を取り入れたい。(教)
- ・今日学んだグループワークの手法は学務で実施している職員研修でも活かせる。(職)



2日目の集合写真

春学期公開授業報告

FD推進部兼務教員 物部博文

平成24年度春学期の公開授業

春学期の公開授業は、主に新任教員の研修を目的としつつ、例年通り授業を広く公開する目的で実施した。

まず、4月26日(木)にFD推進部門長の

上野誠也教授の「基礎振動論」の授業が実施された。

次いで7月に教育人間科学部一柳廣孝教授の

「日本の近代文学」、伊藤信之教授の「陸上」、留学生センター藤井桂子教授の「J111 漢字・語彙」、経営学部田名部元成教授の「グループ思考システム論」が公開された。

新任教員に加え、FD関係者やSDスタッフも公開授業に参加するなど、参加者も昨年度より増加した。

「基礎振動論」 上野誠也教授

FD推進部兼務教員 物部博文

4月26日(木)の1時限目に上野誠也FD推進部門長の「基礎振動論」が公開された。

この授業科目は、航空力学の基礎となる科目で、授業当日は、ばねの振動特性をどう理解し、どう計算予測するかという内容であった。講義と演習を巧みに組み合わせた生き生きとした授業であった。同時に、実際のばねに重りをぶらさげた具体物をさりげなく掲示するなど、上野教授のユーモアが見られる場面もあった。授業には初任教員も参加し、自らの授業運営の参考になったという声が聞かれた。



「基礎振動論」の授業風景

「日本の近代文学」 一柳廣孝教授

FD推進部兼務教員 物部博文

7月9日(月)の2時限目に教育人間科学部一柳廣孝教授の「日本の近代文学」が公開された。

当日は、芥川龍之介「近頃の幽霊」をはじめとするさまざまな作品を題材のそこに描かれる幽霊や心霊現象を手掛かりとして、作者の内面や交友関係、彼らが生きた時代背景などを有機的に結び付けた非常に深みのある授業であった。教授の軽やかな語り口もあり、参加した教員、職員からは「時間を忘れるほど面白かった」という声が聞かれた。



「日本の近代文学」での授業風景

「陸上競技」 伊藤信之教授

FD推進部門長 上野誠也

受講学生と会話を進めながら授業は展開していった。これほどまでに対話の多い授業は他に無いのではと思うぐらいに学生とのコミュニケーションを大切にした授業であった。学生は体を動かすだけでなく、常に考え、頭も働かせている。

場所は教室を離れ、陸上競技場である。公開された授業では「走幅跳」を取り上げた。授業の内容は、走幅跳で記録を伸ばすための教え方である。実に分かりやすく、ワンステップずつ飛び方のコツの教え、学生に体験させている。正確に言うと、学生は教師としての教え方を学び、生徒としての習得を体験している。実際の教育現場の両者を学んでいる。

学生達は、授業後に授業内容をノートにまとめて提出する。授業内容の復習を行い、身に付けていく。このノートが教育実習のときの資料になるそうだ。毎週、このノートが学生と教員の間を往復している。ここにも学生と教員とのコミュニケーションが成立している。

今年オリンピックに卒業生が出場したこと

で、国大の陸上部が脚光を浴びた。授業でもフォームのきれいな陸上部らしい学生とごく普通の学生が混じっている。「学生に能力差があると教えるににくいですか。」という質問に伊藤先生は笑顔で答えた。「いや、差があった方がお互いのためになっていいのですよ。一律だと教育の講義は難しいです。」確かに、実践の教育現場は能力差のある生徒しかいない。学生の将来を意識した授業であり、教員とのコミュニケーションを通して、学生は短時間で多くのことを学び、経験することができる授業であった。



「陸上競技」での授業風景

「J11 漢字・語彙」 藤井桂子教授

留学生センター 藤井桂子

日時：7月9日（月）3限
教室：留学生センター106教室
参加者：8名

はじめて日本語を学ぶ留学生にとって、ひらが

な、カタカナに続いて学習する漢字は、難しいというイメージが強く、負担感も大きいようである。しかし、「山」「川」「人」など、もとの形が連想できる漢字は、むしろ形や意味が記憶に残りやすく、親しみやすい側面も持つ。初級のこのクラス

では、漢字のこうした特徴を踏まえ、漢字の成り立ちを交えながら、漢字を導入していく。初級で学ぶ漢字は、複雑な漢字のパーツともなる。重要な読みや意味を学ぶほか、教室での作業を通して、筆の運びや基本的な筆順にも注意を向けさせ、中上級で漢字を学ぶ際にも役立つような基本を身につけることを目指す。公開授業には留学生セン

ター教員のほか、職員の方々の参加があった。授業後回収したアンケートでは、以下のようなコメントが寄せられた。◆視覚的に理解しやすいような進め方だった。◆実際に学生が作業する場面が多くとられており良かった。◆教員对学生のやりとりだけでなく、学生同士のペアワークやグループワークの工夫があるとよい。



「J11 漢字・語彙」での授業風景①



「J11 漢字・語彙」での授業風景②

「グループ思考システム論」 田名部元成教授

経営学部 柴田裕通

経営学部の公開授業は、7月11日第3時限、経営学部講義棟208教室で、今年度ベストティーチャ賞受賞の田名部元成教授により実施された。受講者は約100名であった。公開授業名は、専門科目「グループ思考システム論」である。学生に身近なベーカリーショップを取り上げ、その経営（売上・利益）に関し、シミュレーションゲームを用い、グループ作業を実施し、その振り返り、分析を行うという進め方であった。この講義では、e-learning、授業支援システムも積極的に活用されている。田名部教授はグループワークの結果を丁寧にフォローしながら、損益構造・価格弾力性等についてもわかりやすく解説し、講義の中でも受講生に親切に質問を投げかけるなど、学



「グループ思考システム論」での授業風景

生参加型講義を見事に実現していた。授業への田名部教授の事前準備が十分にうかがえること、それに呼応するように、学生が授業に対して能動的となり、出席率が高まっていることが、見学した教職員から高く評価された。

第2回しゃべり場報告「どうして大学に行くのか」

学生FDグループ／教育人間科学部1年 中里美咲

イベント概要

平成24年6月29日(金)、横浜国立大学教育文化ホール中集会室にて、本学の教員・職員・学生約70名が集い、「しゃべり場」が開催された。



しゃべり場会場 教育文化ホール

今回は第2回ということもあり、話し合いだけにとどまらず、大学教育の具体的な改善策を提案することや、行動に移すための一歩手前の段階を目的とした。テーマとして、「どうして大学に行くのか」を念頭に置いた上で、「①教養教育の問題点②学内の居場所づくり③評価の透明性」の3つの項目を設置した。各テーマを話し合うグループをそれぞれ2つずつ計6グループ作り、学生FDグループに所属する学生スタッフが話し合いの進行を務めた。16:30~18:30という限られた時間の中で複数の議題を同時に話し合う、というのも今回初めての取り組みである。また、途中で休憩を挟んだ後に他のグループに移動し、多様な意見を取り入れるという手法を用いた。最後のまとめに至るまで、白熱した議論が交わされた。

活動報告

冒頭では共催者である学内SDグループ「学びのひろば」(より良い大学を作るためのYNUの教職員グループ)、学生FDグループ紹介の後、

今回「しゃべり場」を開催する趣旨についての説明がなされた。今回が初参加という人も多くいたので、新たに「FD」という活動に興味を持った方も多かったのではないだろうか。



アイスブレイク「自己紹介リレー」

導入の自己紹介が終わるといよいよ「しゃべり場」である。前半はあらかじめ受付で自分が希望したテーマについて話し合った。



しゃべり場「教養教育の問題点」前半の様子

1つのテーマについて2つのグループが存在するので、同じテーマながらも話の展開はグループごとに違ったようである。「どうして大学に行くのか」という部分では教員・学生それぞれで考えている事があり、意見を交流させることで自己の意識を考え直すきっかけとなった。

後半になると席移動をし、前半とは違うテーマについてのグループでしゃべり場をおこなう。こ

れによって、前半とは違った意見を取り入れる事ができ、議論に幅ができるのだ。

ファシリテーターが前半で行われた話し合いを端的にまとめて後半グループに発表してから後半の議論は行われる。学生・教職員ともにさまざまな意見を発し、よりよい大学づくりをしようとする意欲が垣間見えた。



しゃべり場「学内の居場所づくり」後半の様子

後半のしゃべり場を終えると再度元のグループに戻り、これまでの話し合いを基に1つの結論を出すための作業に入った。なかなかまとまらないグループもあったが、それだけ真剣に大学教育改善を考えているという姿勢は十分に評価されるものだろう。結論が実際に大学に反映されることを期待したい。

まとめ

この「しゃべり場」の最後の締めくくりとして学生FDグループ代表の大谷晃悦さんから話があった。『最終的には僕たち学生FDグループのような活動がなくなるのがゴール地点』という言葉には会場全体が頷いていただろう。学生FD活動を広げ、大学改善について考える機会があるのは学生・教職員のどちらにとっても有意義な事であるのは確かである。しかし、それは活動に参加している人々が現在の大学教育に関してなんらかの「不満」を感じている事の表れでもある。

「不満の無い状態」というのは難しいことかもしれないが、学生が「満足のいく学び」のできるような大学づくりをしていくのがこれからの学生FDグループの役目であるということが改めて認識された。今回のしゃべり場は、そういった意味で「大学教育を問い直す」きっかけにもなったのかもしれない。今後は「どうして大学に行くのか」という問いを学生FDグループのメンバーや、しゃべり場に参加した学生・教職員だけでなく、この横浜国立大学に通う全学生で考えていく事が必要だろう。



学会参加報告「大学教育学会第34回大会」

FD推進部門長 上野誠也

大学教育学会第34回大会は、平成24年5月26日（土）と27日（日）に北海道大学で開催された。社会の求めに応える大学教育のあり方に着目して、大会の統一テーマを「転換期の大学教育」とした。世界的な社会・産業構造

の変化、深刻な経済危機に対して、日本では急速な少子化・高齢化、入学志願者の減少、厳しい就職状況を反映するだけでなく、前年に起きた東日本大震災と原発事故がもたらした科学教育の重要性も含んでいる。

2日間のプログラムは右図にその概要が示されているが、400名近い高等教育の研究者や大学教育に携わる教職員で会場が埋め尽くされていた。

プログラム	
第1日目	
午前	
◆ラウンド・テーブル	16件 16会場
午後	
◆ノーベル賞受賞者による基調講演	鈴木章北大名誉教授
◆自由研究発表(1)	41件 7会場
第2日目	
午前	
◆自由研究発表(2)	52件 7会場
午後	
◆シンポジウム	2件 2会場
「学士課程教育の質の改善と教育情報」	
「転換期における科学リテラシー教育の課題」	
◆緊急シンポジウム	
「大学への秋入学をめぐる」	

ラウンド・テーブル

第1日目の午前中は、一つのテーマをじっくりと議論するラウンド・テーブルである。企画者がテーマに関する講演やディスカッションを自由に設定して、テーマを深く掘り下げるのが目的である。企画されたテーマを見れば、現在大学教育で課題となっている点が見える。大きく分類するとなれば、以下となる。

1) 学生を含めた教育方法・教育改善

アクティブ・ラーニングといった教育方法や学生を含めて教育改善を行う取組みに関するテーマである。学生の主体性を持たせて、より高度な教育を進めるための手法な

どが議論された。

2) 成績評価や教育の質保証

学習成果の評価方法への新たな試みや組織的に行う教育の質保証をテーマにしている。大学の教学マネジメントもテーマとして挙げられており、執行部の責務を再考する企画もあった。

3) 授業科目レベルの教育改善

福祉や体育系など特定の専門を持つ教育プログラムに関する議論やどの大学でもあるキャリア教育、教養教育の改善をテーマとしている。

教育改善は1授業科目単位から全学レベルまで対象は広く、また、それに関わる人は教員以外にも学生や職員がいる。様々な切り口からテーマが挙げられている。

ラウンド・テーブルのひとつである「学生の理解を深める教授学習」に参加した。「教授学習」という耳慣れない言葉であるが、原語の‘deep approach’を見れば大体の意味が掴めると思う。‘deep’を直訳し「深い学習」とすれば分かりやすい。「学生主体の教育」の中で、何が学生に深い学習をもたらすかという事例の紹介と参加者の経験からの議論が進められた。簡単な比較が紹介されていたので下表に示す。

深い学習	<ul style="list-style-type: none"> ・意味を持って、適切に取り組もうとする。 ・高い概念レベルに焦点をあて、第一の原理から学び、順に構造化された知識基礎を求める。 ・適切な基礎知識がある。
浅い学習	<ul style="list-style-type: none"> ・単位取得や試験にパスすることのみをみている。 ・事実の記憶で十分と誤解している。 ・不十分な準備時間しかとらない。 ・学習に対する不安がある。

教員は学びの手法を教えることが重要であり、それも段階的に深めることで学生がついてくるといふ報告があった。また、自分の学習に責任を持たせることで、深い学習が実現するというコメントがあった。

自由研究発表

自由な発想で進められた研究報告である。タイトルをみると、「学生主体」「ポートフォリオ」「IR(Institutional Research)」といった言葉が見られる。発表の中から、今年度のFD推進部の重点テーマである「アクティブ・ラーニング」に関して、参考となるフレーズを2件紹介する。

『学生の行動が能動的であっても、認知面が能動的とは限らない。』アクティブ・ラーニングを形式的に取り入れても効果が薄いことを指摘している。学生の経験や動機に合わせて導入しなければ、教員の空回りになる。

『学生のラーニング・コミュニティが学力を上げている。』学生の活動は、個人とは限らず、グループで行われていることがある。そのグループを活用することで、教員の負担が少ない学生主体の学習が可能であることを指摘している。

シンポジウム「学士課程教育の質の改善と教育情報」

教育の質の保証は強く問われているが、どのような情報を公開すれば外部に対して質の保証を示すことが可能であるかを議論した。

学習効果を評価するには、GPA や試験成績などの直接評価とアンケートなどの学生調査の間

接評価がある。一般に、直接評価の方が適切にアウトカムを測定できるような印象を持つが、間接評価は成果に至るまでのプロセスを評価することができる。両者を組み合わせることで適切な評価ができ、教育改善に繋げていくサイクルが成立すると報告があり、海外の事例を紹介した。

一方、GPA は正しく成果を表わしているかという疑問も投げかけられた。GPA の算出には、成績の粗点を、ABC のレターグレードに置換え、そこから数値化している。成績の粗点から直接GPAを算出したfunctional GPAを導入した大学の事例が紹介された。その結果は、レターグレードに置き換えたGPAと大きく異なっていた。すなわち、現在、本学で使用しているGPAは正しく学生の学習成果を現していることに疑問が投げかけられたことになる。

教育の質の保証とその改善は重要なことであり、大学が抱えている課題でもある。しかし、数字で学生の行動を縛るだけでは、本質的な改善には繋がらない。予習・復習の課題を与えれば、当然のことにように授業時間外の学習時間は増える。しかし、それが教育の質を増やしたことには繋がらないことは誰でも理解できる。同様に、一律の評価数値で大学教育を評価するのは間違っている。大学の個性を生かした教育成果が得られているかを判断しなければならず、そのためには大学固有の評価基準を作る必要がある。学内でどのような情報を集め、それをどのように評価し、さらに、どのように学外へ発信するかを全学で考える時に来ている。



FD シンポジウムのお知らせ

「大学に求められる教育の質的転換 ～学習から学修へ～」

文部科学省中央教育審議会が文部科学大臣からの諮問「中長期的な大学教育の在り方について」を受けて、この8月に答申を発表しました。そのタイトルは「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」です。将来の予測困難な社会に対応できる人物が社会から要求されている現代において、大学が今まで行ってきた知識伝達型の教育だけでは不十分であると指摘しています。答申の副題にも掲げられていますように、学生の継続的かつ主体的な学びが重要視され、教員から知識を習う「学習」から学生が自ら知識を修める「学修」へと表現が変更されています。そして、この答申では大学教育の質的転換が急務と提言しています。本年度のFDシンポジウムではこのテーマを取り上げ、様々な視点から大学教育の質的転換を考える場を提供致します。

◆開催日時 11月2日(金) 13:00-16:00

◆場所 大学会館4階ホール

◆プログラム 学外の専門家による3件の講演を予定しています。

「大学教育の質的転換に向けて(仮)」

文部科学省 合田 哲雄氏

「新潟大学における学士課程教育の構築とその実質化に向けての取組」 新潟大学 濱口 哲氏

「学生の能動的学修を促すラーニング・ポートフォリオ」 帝京大学 土持 ゲーリー 法一氏

※ポスター等も掲示しておりますので、そちらもご参照ください。

本誌への原稿を募集しております。また、ご意見・ご感想をお寄せください。

YNU FDニュースレター No. 21

編集／横浜国立大学 大学教育総合センターFD推進部

作成担当：ニュースレター・ワーキンググループ

事務担当：教務課大学教育係

問合せ先：kyomu.kyoiku@ynu.ac.jp

発行／平成24年9月